方中履『切字釈疑』「叶韻」の条を読む
(「切字釈疑」第８節訳注)

富　平　美　波

１．はじめに

本稿は、これまでの拙稿「方中履『切字釈疑』「等母配位」の条を読む（「切字釈疑」訳注１）」（『アジアの歴史と文化』第13輯）・「方中履『切字釈疑』「切韻当主音和」の条を読む（「切字釈疑」訳注２）」（『アジアの歴史と文化』第14輯）・「方中履『切字釈疑』「門法之非」の条を読む」（『山口大学文学会志』第61巻）・「方中履『切字釈疑』「字母増減」の条を読む（「切字釈疑」第４節訳注）」（『アジアの歴史と文化』第15輯）・「方中履『切字釈疑』「真庚能備各母異状」の条を読む（「切字釈疑」第５節訳注）」（『山口大学文学会志』第62巻）・「方中履『切字釈疑』「啞喦上去入」の条を読む（「切字釈疑」第６節訳注）」（『アジアの歴史と文化』第16輯）・「方中履『切字釈疑』「発送収」の条を読む（「切字釈疑」第７節訳注）」（『山口大学文学会志』第63巻）に続き、次の第８節「叶韻」の部分について、本文の校訂と訳注を作成し、若干のまとめを加えたものである。

２　本文

第１節～第７節に引き続き、校合に使用したテキストは下記の５種類である。

〈底本〉

1988年７月江蘇広陵古籍刻印社が線装本で影印刊行した康熙年間汗青閣刻本『古今釈疑』の巻十七（「(汗)」と略称。）

〈校合に用いたテキスト〉

①『四庫全書存目叢書』第99冊（子部）『古今釈疑』（中国科学院図書館蔵清康熙汗青閣刻本影印）の巻十七（「(存)」と略称。）

②『続修四庫全書』第1145冊（子部）『古今釈疑』（中国科学院図書館蔵清康熙十八年楊霖刻本影印）の巻十七（「(続)」と略称。）

③ 1990年７月上海古籍出版社が道光世楷堂刊本を底本として影印刊行した『昭代叢書』の「丙集」に収められている「切字釈疑」（「(昭)」と略称。）

④ 1971年５月台湾学生書局が国立中央図書館藏の旧鈔本を影印刊行した『古今釈疑（原題　授書随筆）』の巻十六（「(授)」と略称。）

次に、底本に従って本文を掲げ、テキスト間で本文の字句に異同がある箇所には、括弧付きの漢数字を付し、後に異同の内容を注記する。

本文を掲載するにあたって、割注と標点に関しては、下記の方法に従った。

・底本で割注であるものは、括弧でくくって記した。

・底本には点が施されているので、下記本文もそれに従って「。」を表示した。判読に苦しむ箇所は、適宜判断した。

Ⅰ　第８節「叶韻」本文

叶韻

詩騷古逸。不協沈韻。則爲古叶音。此不知古自有音。後以世改。反覺古爲異耳。如麻韻多入魚韻。不即入歌韻。此其最較也。下音戸。馬音門甫切。者音楮。野音上與切。後人音轉爲冶。乃更製墅。二土不已複乎。家音姑。賈音古。荼即茶。地志荼(一)陵。音式奢反。則一字相轉明矣。車古但音居。後乃音扯平聲。雅烏一聲。鐃歌朱鷺魚以烏。注引魚魚雅雅。古歌有衙衙。讀作予予。後御有迓音。輅字或亦音迓。而古但有御。離騷來御。叶日夜。其實舊注。夜有羊茹切之音也。忍而不能舍。叶惟靈修之故。則舍亦有御音。鍾鼎文。余皆作㑹。故舍亦余聲。亞惡相通。漢周亞夫。印作惡夫。惡谷侯作亞谷。項王喑啞。本作喑噁。左傳婁豬艾豭。豭亦有居音。詩不吳不敖。吳音話。吳从口从㕣。本有話義。而古但有吾音。何承天別創吴(二)字。以爲大凵(三)。豈不贅乎。詩瑕叶胡。牙叶居。楚辭遠遊霞叶徐。龜策傳瑕叶徐。急就章杷叶租音權。歷書歸邪于終。邪音餘。聘禮十稷曰(四)秅。又作秺。孫愐音陟嫁切。而金日磾封秺侯。音丁故切。谷永傳百官盤互。師古曰。互或作牙。北史文苑傳。彼此好尚。牙有異同。郭璞用牙見。牙互合用。此魚麻之通証也。漢書彡姐反。注音姊也。即匜。古但有迤音。日斜即日睡。天問幹維焉繫。天極焉加。八柱何當。東南何虧。注加音基。此支麻之通証也。黄帝巾机(五)銘。行將爲蛇。叶將用斧柯。蛇有鼉音。楚辭化與他叶。他在歌韻。化音訛。此歌麻之通証也。董子曰。仁人也。義我也。左傳蛾析。戴記蛾子時術之。長楊賦扶服蛾伏。皆讀爲蟻。此歌支之通証也。江夏黄童。天下無雙。黄鵠歌雙與雄叶。降音近烘。此東江(六)之通証也。大横庚庚。余爲天王。慶音羌。行音杭。此陽庚之通証也。他如眞先之通。寒山之通。皆支之通。蕭尤之通。無不皆然。其可強哉。後人漸變。止安其日習聞稱者。亦如今世之便周德清。即詩遵沈孫。烏能語言謳歌從之耶。必

讀父母之母爲畝。夫婦之婦爲否。打爲頂。内爲耐。卦爲恠。盡柱士市皆上聲。自然不近情矣。

Ⅱ　テキスト間の異同

（一）（授）は「荼」を「荼」に作る。

（二）（昭）は「吴」を「吳」に作る。（授）は「吴」を「吳」に作る。

（三）（昭）・（授）は「凵」を「口」に作る。

（四）（昭）は「曰」を「日」に作る。

（五）（昭）は「机」を「機」に作る。

（六）（存）・（続）・（授）は「江」を「陽」に作る。

3．和訳

叶韻

『詩経』や『楚辞』や古逸詩などが沈約の韻に合わないと、古の叶音であるとみなすのは、古にもそれ自身の音があったことを知らないからである。後に時代が変わって音が改まったために、かえって古の音が異様に見え始めただけなのである。例えば、麻韻は多く魚韻に入っており、歌韻に入っていない点などは、最も著しい例である。「下」字は（古には）音は「戸」であり、「馬」は音が「門甫切」であり、「者」は音が「楮」であり、「野」は音が「上與切」であった。後代の人の発音は転じて「冶」となったため、改めて別に「墅」字が作られたのであるが、字形に「土」が二つ含まれているのが既に重複というものではないだろうか。「家」は音が「姑」であり、「賈」は音が「古」であり、「荼」はすなわち「茶」のことである（1）。『漢書』「地理志」で「荼陵」の音が「式奢反」とされている（2）ことからも、もと同一の字から転じたことが明らかだ。「車」は古は単に「居」という音があるだけだったのが、後代になって「扯」の平声の音になったのである（3）。また、「雅」と「烏」とは同音であった（4）。「鐃歌」の「朱鷺」の「魚以烏」の注には「魚魚雅雅」が引用され（5）、古歌にある「衙衙」という語は「予予」と読まれる（6）。後に「御」にも「迓」という音があるようになり、「輅」字もまた音「迓」とされることがあった（7）が、古にはただ「御」の音だけがあったのだ。「離騒」の「来御」は「日夜」と韻を踏んでいるが、実は旧注では「夜」に「羊茹切」の音があるのだ（8）。また「忍而不能舍」が「惟靈修之故」と韻を踏むので、「舍」にも「御」の音があることがわかる（9）。鍾鼎文では「余」はみな「㑹」に作っている。したがって、「舍」にもまた「余」の音があるわけである（10）。「亞」と「悪」は互いに通用する。漢の周亞夫は印では「悪夫」に作られており、また「悪谷侯」が「亜谷」に作

られている（11）。「項王喑啞」を「喑噁」に作る本がある（12）。『左伝』の「婁豬艾豭」の「豭」にも「居」の音がある（13）。『詩経』の「不呉不敖」の「呉」の音は「話」に読まれる。「呉」字は「口」と「夨」の２つの要素が合体してできており、もと「話」の意味があった。しかし古には「吾」の音しかなかったので、何承天が別に「吴」字を作り、「大」と「凵」からできているとしたのである（14）。なんと余計なことではないか。『詩経』では「瑕」が「胡」と押韻し、「牙」が「居」と押韻している（15）。『楚辞』の「遠遊」では「霞」が「徐」と押韻している（16）。「亀策列伝」では「瑕」が「徐」と押韻している（17）。『急就篇』では「杷」が「租」と押韻し「櫂」の音になっている（18）。「歴書」の「歸邪於終」の「邪」は音が「餘」であり（19）、「聘礼」の「十稷曰秅」はまた「秺」にも作られ、孫愐の音は「陟嫁切」である。しかるに金日磾は「秺侯」に封じられており、その音は「丁故切」である（20）。『漢書』の「谷永列伝」の「百官盤互」について、顔師古は「互」は或いは「牙」に作ると注している（21）。『北史』「文苑伝」の「彼此好尚。牙有異同。」は、郭璞は「牙見」を用いており、「牙」と「互」が合用されることがわかる（22）。これは魚韻と麻韻が通用していた証拠である。『漢書』の「彡姐反」は、注に「音姊也」とある（23）。即ち「匜」には古にはただ「迤」の音だけがあった（24）し、「日斜」は即ち「日晲」であった（25）。「天問」の「幹維焉繫。天極焉加。八柱何當。東南何虧。」について、注では「加」は音が「基」だとされている（26）。これは支韻と麻韻の通用していた証拠である。黄帝の「巾机銘」の「行將爲蛇」は「將用斧柯」と押韻している。「蛇」には「鼉」の音があったのである（27）。『楚辞』では「化」は「他」と押韻している。「他」字は歌韻に属すから「化」は音が「訛」だったのである（28）。これは歌韻と麻韻が通用していた証拠である。董子は「仁人也。義我也。」といっており（29）、『左伝』の「蛾析」、『戴記』の「蛾子時術之」、「長楊賦」の「扶服蛾伏」はみな「蛾」を「蟻」と読んでいる例である（30）。これは歌韻と支韻が通用していた証拠である。「江夏黄童。天下無雙。」（31）や、「黄鵠歌」で「双」が「雄」と押韻し（32）、「降」の音が「烘」に近い（33）ことなどは、東韻と江韻が通用していた証拠である。「大横庚庚。余爲天王。」（34）や、「慶」が「羌」の音である（35）こと、「行」の音が「杭」である（36）こと、これらは陽韻と庚韻が通用していた証拠である。その他、真韻と先韻の通用、寒韻と山韻の通用、皆韻と支韻の通用、蕭韻と尤韻の通用など、みな同じでないものはない（37）。どうして無理矢理ということがあろうか。後人は発音がだんだんに変化して、ただ日ごとに耳にしてなれているものに安んじていった。すなわち、今の世の人には周徳清の韻書こそが便利であって、詩が沈約や孫愐の韻書に従っているのなどは、じっさいの話言葉や歌などにおいて従えるわけはないのである。かならず「父母」の「母」を「畝」と発音し、「夫婦」の「婦」を「否」と発音し、「打」を「頂」と発音し、「内」を「耐」と発音し、「卦」を「恠」と発音し、「盡」・「柱」・「士」・「市」などをみな上声に発音するなどは、人情にかけ離れた話なのである（38）。

4．注

(1) ここまでに挙げられている例字とその古音の表記に用いられている字について、中古音における地位を示しておけば、次の通りである。「下」・「馬」・「者」・「野」・「家」・「賈」・「茶」のいずれも上古音の韻部では魚部に属す字である。

「下」　上声馬韻開口匣母二等　胡雅切
　　去声禡韻開口匣母二等　胡駕切
「戸」　上声姥韻匣母　侯古切

「馬」　上声馬韻明母三等　莫下切
「門甫切」(上声姥韻明母)
　「門」　平声魂韻明母　莫奔切
　「甫」　上声麌韻非母　方矩切

「者」　上声馬韻開口章母　章也切
「楮」　上声語韻徹母　丑呂切
　　上声姥韻端母　當古切

「野」　上声語韻禅母　承與切
　　上声馬韻開口以母　羊者切
「上與切」(上声語韻禅母)
　「上」　上声養韻開口禅母　時掌切
　　去声漾韻開口禅母　時亮切
　「與」　平声魚韻以母　以諸切
　　上声語韻以母　余呂切
　　去声御韻以母　羊洳切
「冶」　上声馬韻開口以母　羊者切
「墅」　上声語韻禅母　承與切

「家」　平声麻韻開口見母二等　古牙切
「姑」　平声模韻見母　古胡切

「賈」　上声姥韻見母　公戸切

上声馬韻開口見母二等　古疋切

去声禡韻開口見母二等　古訝切

「古」　上声姥韻見母　公戸切

「荼」　平声模韻定母　同都切

平声麻韻開口船母　食遮切

平声麻韻開口澄母二等　宅加切

「茶」　平声麻韻開口澄母二等　宅加切（「檫」に同じ。俗。）

(2)『漢書』巻二十八下「地理志」第八下の「長沙国」の属県に「荼陵」県がある。その注に次のように言うのがここの典拠ではあるまいか。

師古曰、荼音弋奢反、又音丈加反。

ここに掲げたのは中華書局の標点本二十四史による本文であるが（同版の『漢書』冊５　p.1639）、方中履が拠ったのは「弋」を「式」に作る本だったのかもしれない。反切上字が「弋」であれば以母、「式」であれば書母、韻母は中古音では平声麻韻開口三等となる。「丈加反」は平声麻韻開口二等澄母の音になる。

「釈疑」の挙例の字の中古音は下の通りである。

「荼」　平声模韻定母　同都切

平声麻韻開口船母　食遮切

平声麻韻開口澄母二等　宅加切

「式奢切」（平声麻韻開口書母）

「式」　入声職韻開口書母　賞職切

「奢」　平声麻韻開口書母　式車切

(3) 挙例の中古音は次の通り。「車」も上古魚部の字である。

「車」　平声魚韻見母　九魚切

平声麻韻開口昌母　尺遮切

「居」　平声魚韻見母　九魚切

平声之韻見母　居之切

「扯平声」（平声麻韻開口昌母）

「扯」は『広韻』『集韻』には見えないが『漢語大字典』に「《正字通》昌者切」（第三巻　p.1836）とある。従って中古音の枠組では上声馬韻開口昌母の音にあたり、これを平声に変えると「車」の麻韻の音になる。

(4) 挙例の中古音は次の通り。

「雅」　上声馬韻開口疑母二等　五下切

「烏」　平声模韻影母　哀都切

(5) 漢代の「短簫鐃歌」十八種は、沈約撰の『宋書』の「楽志」四に見えるが、それによると、「朱鷺」の曲の本文は「朱鷺、魚以烏。路訾邪。鷺何食。食茹下。不之食。不以吐。将以問誅者。」というものである。句の区切り方については他の解釈もあるが、このように切った場合、「魚」と「烏」は恐らく並列構造のフレーズと解釈され、句末字「烏」・「邪」・「下」・「吐」・「者」(いずれも上古魚部の字) が押韻していると解釈できる可能性が高くなる。これについて、清の王先謙の『漢鐃歌釈文箋正』が、次のように明の楊慎の説を引いている。

楊慎曰、烏叶音鴉。鴉與雅同、韓愈詩魚魚雅雅本此。下叶音鰕、者叶音遮。

すなわち、韓愈の「元和聖徳詩」に登場する「魚魚雅雅」に継承される表現であるという解釈で、「魚魚雅雅」は『漢語大詞典』などによると、魚やカラスが整然と列を成すように、威儀の整ったさまを表す語だということである。『漢語大詞典』は「魚魚雅雅」について楊慎の『升庵詩話』の参照を促しているが、『升庵詩話』の巻九「魚魚雅雅」の条の内容は次の如くである。

古樂府朱鷺曲:「朱鷺, 魚以烏, 鷺何食, 食茹下。」「烏」古與「雅」同叶, 音作「雅」。蓋古字烏也雅也, 本一字也。「雅」與「下」相叶, 始得其音。「魚以雅」者, 言朱鷺之威儀, 魚魚雅雅也。韓文元和聖徳詩「魚魚雅雅」之語本此。「茹」古「荷」字。

(『歴代詩話続編』による)

(6) 挙例の中古音は下の通りである。

「衙」　平声魚韻疑母　語居切(『広韻』「説文曰衙衙行皃、又音牙」)

平声麻韻開口疑母二等　五加切(『広韻』では県名及び人名)

上声語韻疑母　魚巨切(『広韻』「行皃、楚詞云、導飛廉之衙衙、又音牙」)

「予」　平声魚韻以母　以諸切

上声語韻以母　余呂切

「衙衙」について、「釈疑」は「古歌」に見える用語だと言っているが、「衙衙」の語に関して一般に引用される用例は『楚辞』「九辨」に見えるものである。すなわち、宋玉の作とされる「九辨」の第九章の半ばに

左朱雀之茇茇兮、右蒼龍之躍躍。屬雷師之闐闐兮、通飛廉之衙衙。

とあるのがそうで、「衙衙」・「躍躍」が上古の魚部で押韻している部分だが、宋の洪興祖の補注は、それぞれについて、

躍躍、行貌。其俱切。廣韻引此。

衙衙、行貌。舊五乎切、又牛呂切、集韻音魚。

と述べている。「音魚」の１音は、上に引いた『広韻』の平声魚韻の音に等しく、語義の上でも合致している。「釈疑」の「音予」という表記は、この疑母の音が喩母と合流した結果であろう。そして、この魚韻の音であれば、押韻相手字の「躍」（『広韻』平声虞韻群母「其倶切」）とも調和するので、方中履らはこれこそが古音の姿を伝えるものと考えたのであろう。

(7) 挙例の中古音は下の通りである。

「御」　去声御韻疑母　牛倨切

「迓」　去声禡韻開口疑母二等　吾駕切

「輅」　去声暮韻来母　洛故切

「迎える」という意味の「迓」が他に「御」や「輅」とも書かれるようになったという事実については、『集韻』の去声禡韻の「迓」字の条が参考になるであろう。すなわち、『集韻』巻之八、去聲下、四十禡に「訝」字を先頭とする１条があって、次に見るように、所属小韻の代表字となっているが、これがまた「迓」・「御」「輅」とも書かれるとされているのである。

○訝迓御輅　魚駕切。説文相迎也。引周禮諸侯有卿訝發。或作迓御輅。訝一曰疑也。

(8) 取り上げられているのは『楚辞』「離騒」の次の箇所である。

吾令鳳鳥飛騰兮、繼之以日夜。飄風屯其相離兮、帥雲霓而來御。

句末字の「夜」と「御」が韻を踏んでおり、上古魚部の押韻である。「釈疑」が旧注と呼んでいる出典が何なのか未詳であるが、例えば朱熹の『楚辞集注』では、下に引くように、「夜」を「羊茹反」に読むのと、「御」を「音迓」に読むのと、両方の叶音注がつけられている。

夜如字、或叶羊茹反。……（中略）……。御叶音迓、或如字。

(9) この押韻もまた『楚辞』「離騒」のもので、注 (8) で引用した２句よりも前の部分に現れるが、次の箇所がそれである。

余固知謇謇之爲患兮、忍而不能舍也。指九天以爲正兮、夫唯靈脩之故也。

句末から２字目の「舍」と「故」が上古の魚部で押韻している。朱熹の『楚辞集注』では、下記のように、「舍」の読音を御韻の音（反切下字の「預」は『広韻』で去声御韻以母「羊洳切」）に読もうとしてはいるが、声母は変えていない。

舍尺夜反、叶尺預反。或音捨、非是。……。

「釈疑」のいう「御」という読音については、その出所はさだかではない。

(10) 金文に見える「余」の字形には、下部の「八」を欠いた「今」（或「㑹」）に作るものと、

「余」に作るものとがある。「舎」字にも、「口」の上部が「今」である形と「余」である形があるようで、「余」字と「口」との合体した字形であるとみなすことができるから、「舎」が「余」を声符とする字であるという解釈も成り立つ。ちなみに『説文解字』は逆に「余」が「舎」の省声（「从八舎省聲。」第二篇上「八」部）という解釈である。

(11) 前漢の絳侯周勃の子、條侯（『漢書』の「表」では「修侯」）周亜夫の伝は、『史記』では巻五十七の「絳侯周勃世家」に、『漢書』では巻四十の「張陳王周傳第十」に見えるが、いずれも名を「亜夫」と記している。また両書の「表」では、『史記』巻十八「高祖功臣侯者年表第六」の「絳」侯の条の下方の欄に、

　　條六　後二年，封勃子亞夫元年。

と記す。『漢書』巻十六「高惠高后文功臣表第四」に見える「修」侯の条では、

　　後三年，侯亞夫以勃子紹封，十八年、有罪，免。（注：師古曰：「修讀曰條。」）

と記す。いずれも表記は「亞夫」である。

次の「亜谷侯」については、『史記』巻九十三「韓信盧綰列傳第三十三」に

　　孝景中六年，盧綰孫他之，以東胡王降，封爲亞谷侯。

という叙述があり、これに注釈して劉宋の裴駰の『史記集解』が次のように言っている。

　　徐廣曰：「亞，一作『悪』。」

『史記』の「表」では、「亜谷侯」は巻十九「惠景閒侯者年表第七」に見えており、表記はやはり「亞谷」である。「以匈奴東胡王降，故燕王盧綰子侯，千五百戸。」と記されているから上記の盧綰伝に見える「亞谷侯」と同じものであることは明白である。「表」の「亞谷」に対して、唐の司馬貞の『史記索隠』が次のように注している。

　　一作「悪父」，漢表在河内。

一方、同じ事について『漢書』では、巻三十四の「韓彭英盧呉傳第四」に次のように記述されており、ここでは「悪谷侯」に作られている。

　　孝景帝時，綰孫它人以東胡王降，封爲悪谷侯。傳至曾孫，有罪，國除。

ところが『漢書』の「表」では、巻十七「景武昭宣元成功臣表第五」に「亞谷簡侯盧它之」と記されていて、こちらでは「亞谷侯」に作られている。

この「周亜夫」と「亜谷侯」の表記において、「亜」と「悪」が通用している事については、宋の王楙が『野客叢書』において既に指摘している。すなわち、「名與本傳不同」の条の次の記載がそうで、「釈疑」もこのようなものに基づいて、論を立てているのかもしれない。

　　有得漢周悪夫印，或疑悪非亞字，劉原父謂悪亞二字，古者通用，案史記盧綰孫封悪谷侯，漢書作亞谷侯是矣。

「亜」と「悪」は上古音ではいずれも鐸部（魚部の入声）の所属字で、中古音は次の通りである。

「亜」　去声禡韻開口影母二等　衣嫁切

「悪」　平声模韻影母　哀都切

去声暮韻影母　烏路切

入声鐸韻開口影母　烏各切

(12)『史記』巻九十二の「淮陰侯列傳第三十二」の、淮陰侯韓信が漢王劉邦に語った言葉の中に

項王喑噁叱咤，千人皆廢，然不能任屬賢將，此特匹夫之勇耳。

というくだりが見える。司馬貞の『史記索隠』には

上於金反，下烏路反。喑啞，懐怒気。

とあって、こちらは「喑啞」に作る。方中履の当時の知識として、『史記』の表記に「喑啞」と「喑噁」の両方があることが知られていたのではなかろうか。なお、『漢書』の韓信伝（巻三十四「韓彭英盧呉傳第四」）では、「項王意烏」となっている。「啞」と「噁」は、声符から見てもやはり上古鐸部（魚部入声）の字で、中古音は次の通りである。

「啞」　上声馬韻開口影母二等　烏下切

去声禡韻開口影母二等　衣嫁切

入声陌韻開口影母二等　烏格切

入声麦韻開口影母　於革切

「噁」　去声暮韻影母　烏路切

(13)『春秋左氏伝』の「定公十四年」の伝に、「婁豬」と「艾豭」で押韻していると見られる「野人歌」が載っている。

衛侯爲夫人南子召宋朝、會于洮。大子蒯聵獻盂于齊、過宋野。野人歌之曰、既定爾婁豬、盍歸吾艾豭。

「豬」と「豭」は上古魚部の字で中古音は次の通り。

「豬」　平声魚韻知母　陟魚切

「豭」　平声麻韻開口匣母二等　胡加切

「居」　平声之韻見母　居之切

平声魚韻見母　九魚切

「釈疑」は「豭」の読音を「居」としているが、「豭」は匣母の字であり、例えば宋の呉棫の『韻補』では、下記のように、同じく『左伝』の「野人之歌」を引きながらも、「瑕」や「霞」等と同音の「洪孤切」としている。

○侯　洪孤切　……。豭：豕也。左氏傳野人之歌曰、既定爾婁豬、盍歸我艾豭。

(14) ここに現れる関連字の中古音は次の通りである。

「呉」　平声模韻疑母　五乎切

「吾」　平声模韻疑母　五乎切

　　平声麻韻開口疑母二等　五加切

「吴」　去声禡韻合口匣母二等　胡化切（「大口」）

「話」　去声夬韻合口匣母　下快切

　（『集韻』去声禡韻合口匣母二等　胡化切）

引用されている『詩経』の詩句「不呉不敖」は「周頌」「絲衣」の第８句である。同様の表現が『詩経』「魯頌」の「泮水」第６章の第６句「不呉不揚」にもある。これらの「呉」字の字形・読音に関して古来議論があったらしい。『経典釈文』は「絲衣」の「不呉」について次のように言っており、「釈疑」が言及する何承天の説はここに引かれている。

　舊如字。譁也。說文作吳、吳大言也。何承天云、吳字誤。當爲吴、從口下大、故魚之大口者名吴、胡化反。此音恐驚俗也。音話。

また、「泮水」の「不呉」についての『釈文』の記述は下記のようである。

　不吳　鄭如字。讙也。又王音誤作奥、音話、同。

なお、上記の２条の『釈文』の本文は、通志堂本と盧文弨の抱経堂本とで文中の「呉」と「吴」の表記の校訂結果がとりどりであり、ここでは一律に阮元等『十三経注疏校勘記』の主張に従った。上の「絲衣」篇の「不呉」の注釈において『釈文』が参照していた『説文解字』の「呉」字の条であるが、説解の全文は次の通りで、大徐本の注では、字形を「吴」、字音を「乎化切」とする説が、徐鍇によって否定されている。

　吳　姓也。亦郡也。一曰、吳大言也。从矢口。

　（注）五乎切。徐鍇曰、大言、故矢口以出聲。詩曰不吳不揚、今寫詩者改吳作吴、又音乎化切、其謬甚矣。

これらの記述から見ると、「釈疑」の本文は前半は底本に従って「何承天別創吴字」に、後半は（昭）・（授）に従って「以爲大口」とするのが妥当なように思われる。なお、上古音では、「呉」は魚部、「譁」も魚部の所属字である。一方、「話」や「化」は歌部（及び月部）所属字で、上古音における出自は異なる。

(15)「瑕」・「胡」・「牙」・「居」は全て上古音では魚部の字で、中古音は次の通りである。

「瑕」　平声麻韻開口匣母二等　胡加切

「胡」　平声模韻匣母　戸呉切

「牙」　平声麻韻開口疑母二等　五加切

「居」　平声魚韻見母　九魚切

平声之韻見母　居之切

王力の『詩経韻読』に従うと、『詩経』の中で、「瑕」が「胡」と押韻している箇所は、「国風」「豳風」の「狼跋」第２章にある。同章は全４句で、

狼疐其尾、載跋其胡、公孫碩膚、德音不瑕。

という詩句の、第２・３・４句の句末字「胡」・「膚」（『広韻』平声虞韻非母　甫無切、魚部）・「瑕」が押韻している。また、「牙」が「居」と押韻している箇所は、「小雅」「祈父」の第１章がそうである。この章は全４句で、

祈父、予王之爪牙、胡轉予于恤、靡所止居。

という詩句の、第２句の「牙」と第４句の「居」とで押韻している。

(16)『楚辞』の「遠遊」の中に「霞」と「徐」が押韻する部分は出てこない。「霞」と押韻するのは「除」で、「釈疑」本文が「徐」に作るのは、次の「亀策列伝」の押韻字に「徐」が出ることから誤ったのではないだろうか。「遠遊」の中でこれらの字が押韻している部分は、全章の半ばより前に登場する「重曰」の部分で、一連の押韻を構成する詩句は次のようである。

春秋忽其不淹兮、奚久留此故居

軒轅不可攀援兮、吾将隨王喬而娛戲

飡六氣而飲沆瀣兮、漱正陽而含朝霞

保神明之清澄兮、精氣入而麤穢除

「居」・「霞」・「除」が魚部で押韻することには問題はないだろう。各字の中古音は次の通りである。

「居」　平声魚韻見母　九魚切

　　平声之韻見母　居之切

「霞」　平声麻韻開口匣母二等　胡加切

「除」　平声魚韻澄母　直魚切

　　去声御韻澄母　遅倨切

王力の『楚辞韻読』では「戲」字も魚部で押韻に参加していると見なされているが、「戲」は中古音では支韻の音を持ち、一般には歌部の所属字と見なされている字である。

「戲」　平声支韻開口暁母三等　許羈切

　　平声模韻暁母　荒烏切（「古文呼字」）

　　去声寘韻開口暁母三等　香義切

但し、朱熹の『楚辞集注』では、「戲」について「戲、音嬉、叶音虚。」と注しており、「霞」には「霞、叶音胡」という叶音注を付しているのであるから、朱熹などは「戲」も押韻字に含めて考えている可能性が高い。また『集注』は「娛戲」の２字について「二字一作戲娛、非是。」と注

しているから、句末字を「娛」とする解釈もあったらしい。

(17)『史記』の「亀策列伝」は太史公の序のみあって本文がなく褚少孫が補った伝の１つとされるが、「瑕」と「徐」を含む押韻が現れるのは、次の部分である。

孔子聞之曰。神龜知吉凶、而骨直空枯。日爲德、而君於天下。辱於三足之烏。月爲刑而相佐。見食於蝦蟇。蝟辱於鵲。騰蛇之神、而殆於即且。竹外有節理、中直空虛。松柏爲百木長。而守門閭。日辰不全、故有孤虛。黃金有疵、白玉有瑕。事有所疾、亦有所徐。物有所拘、亦有所據。罔有所數、亦有所疏。人有所貴、亦有所不如。

この段落の押韻字については、滝川亀太郎の『史記会注考証』に次のような記述があって、

枯烏蟇且閭虛瑕徐據疎如韻。桃源抄云、據、音倨、敖也。罔、網同。數。音朔、細也。

「枯・烏・蟇・且・閭・虛・瑕・徐・據・疎・如」が一連の押韻であるという解釈が示されている。漢代の分部と『詩経』などの上古音の分部とは少し異なるが、いま、各字の中古音と上古の所属韻部を示せば、次の通りで、確かに全て上古魚部に所属の字である。

「枯」　平声模韻溪母　苦胡切　魚部
「烏」　平声模韻影母　哀都切　魚部
「蟇」　＝「蟆」平声麻韻明母二等　莫霞切（「蝦蟆、亦作蟇。」）　魚部
「且」　平声魚韻精母　子魚切　魚部
　　上声馬韻開口清母　七也切
（『史記正義』「卽、津日反、且、則餘反、吳公也、狀如蚰蜒、而大黑色。」）
「閭」　平声魚韻来母　力居切　魚部
「虛」　平声魚韻暁母　朽居切　魚部
　　平声魚韻溪母　去魚切
「瑕」　平声麻韻開口匣母二等　胡加切　魚部
「徐」　平声魚韻邪母　似魚切　魚部
「據」　去声御韻見母　居御切　魚部
「疏」　＝「疏」平声魚韻生母　所葅切　魚部
　　去声御韻生母　所去切
「如」　平声魚韻日母　人諸切　魚部
　　去声御韻日母　人恕切

(18) 関連する文字の中古音は次の通り。

「杷」　平声麻韻並母二等　蒲巴切
　　去声卦韻並母　傍卦切

去声禡韻並母二等　白駕切

「租」　平声模韻精母　則吾切

「櫂」　平声虞韻群母　其俱切

ここで挙例となっている『急就篇』であるが、ここで取り上げられているのは、同書の

種樹収斂賦税租、捃穫秉把挿捌杷

という部分の句末字が互いに押韻しているという事だけであるが、羅常培・周祖謨の『漢魏晋南北朝韻部演変研究　第一分冊』の「七、個別方言材料的考査」「2　急就篇」によれば（p.85)、この２字は、長い一連の押韻の一部にすぎず、全体の押韻は次の13の韻字からなる。

鋤・租・杷・樗・扶・驢・超・羭・豬・雛・駒・趨・芻

うち「超」字だけが宵部の字で他は魚部、全体は魚部・宵部の合韻であるという。「租」と「杷」を除く他の押韻字の中古音は次の通り。

「鋤」　平声魚韻崇母　士魚切（「鉏」に同じ。）

「樗」　＝「樗」平声魚韻徹母　丑居切

「扶」　平声虞韻奉母　防無切

平声虞韻非母　甫無切

「驢」　平声魚韻来母　力居切

「超」　平声宵韻徹母　敕宵切

「羭」　平声虞韻以母　羊朱切

「豬」　平声魚韻知母　陟魚切

「雛」　平声虞韻崇母　仕于切

「駒」　平声虞韻見母　舉朱切

「趨」　平声虞韻清母　七逾切

「芻」　平声虞韻初母　測隅切

(19)『史記』巻二十六「歴書第四」に見える次の語句に基づくと思われる。

周襄王二十六年閏三月。而春秋非之。先王之正時也、履端於始、舉正於中、歸邪於終。履端於始、序則不愆。舉正於中、民則不惑。歸邪於終、事則不悖。

「歸邪於終」の「邪」については、劉宋・裴駰の『史記集解』がこういっている。

邪、音餘、韋昭曰、邪、餘分也、終、閏月也、中氣在晦、則後月閏在望、是其正中也。

「邪」は「餘分」の意だとする韋昭の説を受けて、「邪」字が「餘」と読まれているわけであるが、滝川の『考証』は、ここで「春秋」と呼ばれているのは『左伝』の文公元年の伝だといい、「歸邪於終」の「邪」字について、「左傳、邪作餘。」と注している。そこで、『春秋左氏伝』の「文公元年」の伝を見ると、「於是閏三月」に始まる一段が、ちょうど『史記』の記事と一致し、そこで

「歸邪於終」の「邪」にあたる言葉が２度とも「餘」で書かれていることがわかる。

於是閏三月、非禮也。先王之正時也、履端於始、擧正於中、歸餘於終。履端於始、序則不愆。擧正於中、民則不惑。歸餘於終、事則不悖。

「邪」字と「餘」字はともに上古魚部の所属字で、中古音は次の通り。

「邪」　平声麻韻開口邪母　似嗟切

平声麻韻開口以母　以遮切

「餘」　平声魚韻以母　以諸切

(20)「秅」・「秺」は、声符「乇」・「宅」から判断して、上古鐸部（魚部入声）の字であり、関連する文字の中古音は次の通り。

「秅」　平声麻韻開口澄母二等　宅加切（「周禮云聘禮曰、…、十稯曰秅。」）

去声暮韻端母　當故切（「禾束。又縣名、在濟陰。或作秺。」

『集韻』平声麻韻開口知母二等　陟加切（「數也、二秭爲秅、一曰麻屬。」）

「秺」　去声暮韻端母　當故切（「秅」に同じ。）

『集韻』「普」去声暮韻端母　都故切（「漢侯國名、在成武、通作秺。」）

『集韻』平声麻韻開口知母二等　陟加切（「縣名、在濟陰。通作庲。」）

「陟嫁切」（去声禡韻開口知母二等）

「陟」　入声職韻開口知母　竹力切

「嫁」　去声禡韻開口見母二等　古訝切

「丁故切」（去声暮韻端母）

「丁」　平声耕韻開口知母　中莖切

平声青韻開口端母　當經切

「故」　去声暮韻見母　古暮切

「釈疑」が引用する「十稯曰秅」は、『儀礼』の「聘礼」末尾の、量の単位を表す語についての解説の中に登場する。

十斗曰斛、十六斗曰籔、十籔曰秉、二百四十斗、四秉曰筥、十筥曰稯、十稯曰秅、四百秉爲一秅。

上に見たように、『広韻』では「秺」は「秅」の異体字とされており、義注にやはり「聘礼」が引かれている。但し「釈疑」が言う孫愐音「陟嫁切」の源はよくわからない。この反切では去声になってしまうように思われるが、『集韻』などに見るように、「秺」・「秅」の麻韻系の読音は平声である。

その次に引かれている金日磾が「秺侯」に封じられた記事は、『漢書』巻六十八「霍光金日磾傳第三十八」の金日磾の本伝に見える。すなわち

初武帝遺詔㠯討莽何羅功封日磾爲秺侯

とあるのがそれで、ここに下記のような唐・顔師古の注がついており、

師古曰、秺音丁故反。

「釈疑」の読音はこのあたりから既に淵源があると思われる。

(21)「互」と「牙」の上古所属韻部と中古音は次の通り。やはり魚部の問題である。

「互」　去声暮韻匣母　胡誤切　魚部

「牙」　平声麻韻開口疑母二等　五加切　魚部

「釈疑」が引用している用例は、『漢書』巻八十五「谷永杜鄴傳第五十五」の谷永伝に現れる「百官盤互、親疏相錯」という表現で、「釈疑」の言う通り、この部分に対する顔師古の注には、「互」字と「牙」字の通用現象に触れた記述が現れる。

師古曰、盤互、盤結而交互也。錯、間雜也。互字或作牙、言如豕牙之盤曲、犬牙之相入也。

(22) 引用の句は、唐・李延寿撰『北史』巻八十三、列伝第七十一、「文苑」伝の冒頭、総論の部分に現れるものであるが、『北史』の用字は「互」に作る。

暨永明、天監之際，太和、天保之間，洛陽、江左，文雅尤盛，彼此好尚，互有異同。

『北史』では引用部分を含む一節で、主として南北の詩人の気質の違いを述べており、引用部分はその冒頭部分にあたる。但し、「釈疑」に引かれている郭璞の出典は未詳である。

(23) 2字の中古音は次の通り。「姊」は上古脂部である。

「姐」　上声馬韻開口従母四等　慈野切

「姊」　上声旨韻開口精母　將几切

引用されている語句は、『漢書』巻七十九「馮奉世傳第四十九」からのものである。

永光二年秋、隴西羌彡姐旁種反

という記事がそれで、顔師古の注に言うところでは、

師古曰、彡音所廉反、又音先廉反。姐音紫。今西羌尚有此姓、而彡音先冉反。

「釈疑」が「音姊」に作る読音は、この「音紫」(「紫」上声紙韻開口精母　將此切) に当たるものであろうか。

(24) ここからは、中古の麻韻と支韻の字が、上古歌部から発している事実を取り上げる。ここの挙例である「匜」・「迤」の中古音は次の通りで、「匜」の声符「也」は上古歌部の字である。

「匜」　平声支韻開口以母　弋支切

上声紙韻開口以母　移爾切

「迤」　『集韻』上声紙韻開口以母　演爾切（「迆」に同じ。「説文衺行也。」）

『集韻』平声支韻開口以母　余支切（「委蛇」の「蛇」に同じ）

(25)「斜」と「晠」の中古音は下の通り。但し、「斜」は上古魚部の字で、「施」声の字は歌部である。

「斜」　平声麻韻開口以母　以遮切

平声麻韻開口邪母四等　似嗟切

「晠」　平声支韻開口以母　弋支切

『集韻』平声支韻開口以母　余支切（「説文日行晠晠也。」）

『史記』巻八十四「屈原賈生列傳第二十四」の賈生の伝に、「鵩鳥賦」の引用があって、その中に「日施」という表現が現れる。

其辭曰。單閼之歳兮、四月孟夏。庚子日施兮、服集予舍。止于坐隅、貌甚閒暇。

の「日施」がそうで、劉宋・裴駰の『史記集解』に、

徐廣曰、施一作斜。

とあり、唐・司馬貞の『史記索隠』は、

施、音移、施、猶西斜也。漢書、作斜也。

と注している。『索隠』が指摘している通り、『漢書』巻四十八「賈誼傳第十八」では、次のような表記で引用されており、「日施」は「日斜」と書かれている。また『史記』に見える「兮」字も省かれている。

其辭曰。單閼之歳、四月孟夏。庚子日斜、服集余舍。止于坐隅、貌甚閒暇。

顔師古の注は「孟康曰、日斜、日昳時」であるが、清の王先謙の補注は『史記』との表記の違いに触れて、次のように叙述している。

先謙曰、史記作日施。索隠施音矢移反、猶西斜也。

なお、「鵩鳥賦」は『文選』巻第十三にも載っているが、その表記は次のようになっていて、やはり「斜」字を用いている。

其辭曰。單閼之歳兮、四月孟夏。庚子日斜兮、鵩集予舍。止于坐隅兮、貌甚閒暇。

（李善注に「李奇曰、日西斜時也。」とある。）

(26) 挙例に現れる字の中古音は次の通り。押韻しているとされる「加」と「虧」は上古歌部の字である。

「加」　平声麻韻開口見母二等　古牙切

「基」　平声之韻見母　居之切

「虧」　平声支韻合口溪母三等　去爲切

引用されている『楚辞』「天問」の一節は、

　　斡維焉繫。天極焉加。八柱何當。東南何虧。

と言う部分で、第１字目は「幹」ではなく「斡」である。この部分は「加」と「虧」の２字だけで独立した押韻を形作っており、この部分の前後はまた別の押韻に属する。朱熹の『楚辞集注』は、「加」に正に「基」という音を想定しているが、以下に引いた通り、「加」と「虧」の２字を麻韻の音で調和させるか、止摂の音で調和させるか、どちらも可能だと見ているようである。

　　加，叶音基，又如字。虧如字，又叶苦家反。

(27) 関連する文字の中古音は次の通り。

「蛇」　平声支韻開口以母　弋支切

　　平声歌韻透母　託何切

　　平声麻韻開口船母　食遮切

「鼉」　平声歌韻定母　徒河切

「柯」　平声歌韻見母　古俄切

引用されている黄帝の「巾机銘」は、「行將爲蛇」・「將用斧柯」という引用句から判断して、明の馮惟訥撰『古詩紀』巻十「古逸第十　古諺」に掲載されている「太公兵法引黄帝語」に最も合致するようである。その本文は次のようである。

　　日中不彗、是謂失時、操刀不割、失利之期、執斧不伐、賊人將來、涓涓不塞、將爲江河、熒熒不救、炎炎奈何、兩葉不去、將用伐柯、爲虺弗摧、行將爲蛇

６句目の「來」に「叶陵之反」、最終句の「蛇」に「叶唐何反」と音注が施されているほか、この詩について次のような解題がなされている。

　　賈子書引止日中必彗、操刃必割二句、其餘見太公兵法、即漢藝文志黄帝巾機銘也。

後半は「河」・「何」・「柯」・「蛇」で押韻しているのであろう。上古歌部の押韻である。

(28) 挙例に登場する字の中古音は次の通り。

「化」　去声禡韻合口暁母　呼覇切

「訛」　平声戈韻合口疑母　五禾切

「他」　平声歌韻透母　託何切

『楚辞』で「他」と「化」の２字で押韻が形作られている例は、「離騒」の下記の部分である。歌部の押韻である。

　　初既與余成言兮、後悔遁而有他、余既不難夫離別兮、傷靈修之數化

(29) 挙例に登場する字の中古音は次の通りで、どちらも上古歌部の字である。

「義」　去声寘韻開口疑母三等　宜寄切

「我」　上声哿韻疑母　五可切

「董子」とは前漢の董仲舒のことであろう。引用されている声訓は恐らく『春秋繁露』「仁義法」に現れる次のような記述に基づいているのではなかろうか。

春秋之所治，人與我也。所以治人與我者，仁與義也。以仁安人，以義正我，故仁之爲言人也，義之爲言我也，言名以別矣。

(30)「蛾」・「蟻」はともに上古歌部の字で、中古音は次の通り。

「蛾」　平声歌韻疑母　五何切

上声紙韻開口疑母三等　魚倚切（「蟻」に同じ）

「蟻」　上声紙韻開口疑母三等　魚倚切（「蟻」に同じ）

「釈疑」は「蛾」と「蟻」の通用例を３例挙げているが、まず、『春秋左氏伝』のそれは、「僖公十五年」伝の十月の記事の中に登場する次の部分である。

蛾析謂慶鄭曰、盍行乎。

晋・杜預の注に「蛾析、晉大夫也。」とあるから、「蛾析」は人名であるが、この「蛾」について『経典釈文』（巻第十五「春秋左氏音義之一」）には次のように注釈がある。

蛾、魚綺反、本或作蟻、一音五何反。

つまり、テキストによっては「蟻」に作る本があり、音は「ギ」だということである。２番目の例は「釈疑」は「戴記」に作っているが、引用文の内容からして『礼記』のことだと思う。すなわち、『礼記』の「學記」に

記曰、蛾子時術之、其此之謂乎。

とあるのがそうで、鄭玄の注には次のように解説されている。

蛾、蚍蜉也。蚍蜉之子、微蟲耳。時術蚍蜉之所爲、其功乃復成大垤。

『経典釈文』は次のように言う（巻十三「禮記音義之三」）。

蛾子、魚起反、注同、本或作蟻。蚍、音毗。蜉、音浮、爾雅云、蚍蜉大蟻。……。大垤、大結反、毛詩傳云蟻冢也。

従ってここの「蛾」も「蟻」に作る本があり、意味上もアリのことだと解釈されているわけである。３番目の「長楊賦」は前漢・揚雄の作で、『漢書』巻八十七下「揚雄傳下」に収録されているが、「釈疑」に引用されているのは

皆稽顙樹頷、扶服蛾伏。

の部分で、「蛾伏」の意味について顔師古の注は次のように言っている。

蛾與蟻同。蛾伏者，言其伏如蟲蟻也。

『文選』巻第九に収録されている「長楊賦」の本文は、「頷」を「頷」に作るほかは『漢書』と同

文で、李善の注が、「蛾伏」に対して次のような注釈をしている。

蛾伏如蟻之伏也。蛾古蟻字。

(31)「童」と「双」の中古音は次の通りで、ともに上古東部の字である。

「童」　平声東韻定母一等　徒紅切

「双」　平声江韻生母　所江切

引用されている押韻例は宋・范曄撰『後漢書』巻八十上「文苑列傳第七十上」の「黄香」の伝に見える。

遂博學經典，究精道術，能文章，京師號曰「天下無雙江夏黄童」。初除郎中，元和元年，肅宗詔香詣東觀，讀所未嘗見書。香後告休，及歸京師，時千乘王冠，帝會中山邸，乃詔香殿下，顧謂諸王曰：「此『天下無雙江夏黄童』者也。」左右莫不改觀。

「釈疑」の引用とは句の順序が逆であるが、二度にわたって登場している。

(32)「双」と「雄」の中古音は次の通り。「双」は上古東部の字であるが、「雄」は蒸部の所属字である。

「双」　平声江韻生母　所江切

「雄」　平声東韻云母　羽弓切

押韻例として引かれている「黄鵠歌」は『太平御覧』などの類書や『楽府詩集』などにも載っているが、『列女伝』巻四「魯寡陶嬰」の条に登場する歌である。収録書によって詩句に若干の異同があるようだが、『古列女傳』の記述は次のようである（四部叢刊本による）。

陶嬰者、魯陶門之女也。少寡、養幼孤、無強昆弟、紡織爲産。魯人或聞其義、將求焉。嬰聞之、恐不得免、作歌明己之不更二也。其歌曰、黄鵠之早寡兮、七年不雙。鵷頸獨宿兮、不與衆同。夜半悲鳴、想其故雄。天命早寡兮、獨宿何傷。寡婦念此兮、泣下數行。嗚呼哉兮、死者不可忘。飛鳥尚然兮、況于貞良。雖有賢匹兮、終不重行。魯人聞之曰、斯女不可得已。遂不敢復求。嬰寡終身不改。君子謂陶嬰貞一而思、詩云、心之憂矣、我歌且謠、此之謂也。

(33)「降」は江韻の字で、後代むしろ唐・陽韻など宕摂の音に近くなるが、本は上古冬部の字で、冬韻や東韻三等の字と同韻部であった。なお、「烘」のような「共」声の字は、上古東部に属する。江韻の字には上古・東部から出ているものもあり、むしろそちらのほうが多い。

「降」　平声江韻匣母　下江切

　　去声絳韻見母　古巷切

「烘」　平声東韻匣母一等　戸公切

　　平声東韻暁母一等　呼東切

去声送韻匣母一等　胡貢切

去声送韻曉母一等　呼貢切

「釈疑」が典拠とした文献は不明だが、宋・呉棫の『韻補』では、「降」は「胡公切」である（巻一「上平聲　一東」)。「烘」と同音と思われる。『韻補』の該当条の本文は次のようである。

降、胡公切。下也。毛詩、我心則降。屈原騒經、帝高陽之苗裔兮、朕皇考曰伯庸、攝提貞于孟陬兮、維庚寅吾以降。

明の陳第の『毛詩古音考』では「降」は「音洪」である（巻一)。『毛詩古音考』は少数の例外を除いて直音を用いている。

降　音洪、宜屬東韵。沈約入江韵、如今讀。然東方朔七諫、忠臣貞而欲諫兮、讒諛毀而在旁。秋草榮其將實兮、微霜下而夜降。音之變有自來矣。

古音以後の音変化に触れるのが『毛詩古音考』にしばしば見られる特色である。

(34)「庚」と「王」の中古音は次の通りで、ともに上古陽部の字である。

「庚」　平声庚韻開口見母二等　古行切

「王」　平声陽韻合口云母　雨方切

去声漾韻合口云母　于放切

引用されている押韻例は、『史記』巻十「孝文本紀第十」の中に現れる。すなわち

代王報太后計之。猶與未定。卜之龜。卦兆得大横。占曰。大横庚庚。余爲天王。夏啓以光。代王曰。寡人固已爲王矣。又何王。卜人曰。所謂天王者。乃天子。

というくだりに現れる、卜兆を解き明かした韻文である。「釈疑」は初めの２句しか引用していないが、恐らく全章を通じて「庚・王・光」で押韻しているのであろう。

(35) 中古音の庚韻の所属字には上古の陽部から来たものが交じっており、「慶」はその一つである。従って上古の韻文ではしばしば唐韻・陽韻の字と押韻する上、平声の字と押韻する傾向があることでも知られている。そのため古韻の研究家によって陽韻平声の音を附されることが多かった。

「慶」と「羌」の中古音は下記の通りである。

「慶」　去声映韻開口溪母二等　丘敬切

「羌」　平声陽韻開口溪母　去未切

宋・呉棫の『韻補』の音は「墟羊切」である（巻二「下平聲　十陽」)。しかし解説の中では、しばしば「音羌」という直音表記を引き合いに出している。

慶　墟羊切。賀也、福也。蕭該漢書音義曰、慶音羌。今漢書亦有作羌者。詩與易凡慶皆當讀如羌。急就章所不侵龍未央、尹嬰齊翟回慶。

明の陳第の『毛詩古音考』は全体に直音注を用いているので、表記は「音羌」である。解説は下記の如くで、「羌」という読音に触れた部分は、『韻補』の言うところと同じ材料を受け継いでいることが明らかである（巻三）。

慶　音羌。蕭該漢書音義曰、慶音羌。今漢書亦有作羌者。詩與易凡慶皆當讀如羌。古亦音卿、故慶雲讀卿雲。班固白雉詩、彰皇德兮侔周成、永延長兮膺天慶。卿亦可讀羌、故楚辭大招、諸侯畢極立九卿只、昭質既設大侯張只。

(36)「行」は下記のように字義によっては唐韻の音（「杭」と同音）に読まれることもあるが、もともと上古陽部の字であり、庚韻の所属字の半ばが上古陽部から出ていることを反映して、上古の韻文ではしばしば唐・陽韻の字と押韻する状況にある。

「行」　平声唐韻開口匣母　胡郎切
　　平声庚韻開口匣母二等　戸庚切
　　去声宕韻開口匣母　下浪切
　　去声映韻開口匣母二等　下更切
「杭」　平声唐韻開口匣母　胡郎切

呉棫の『韻補』の音は「寒明切」である（巻二「下平聲　十陽」）。反切下字の「明」は同じ韻にあって「謨郎切」とあるから、その音を採ったものか。解説では次のように言う。

行　歩也。五行水火金木土、釋名、兩脚進曰行、行、伉也、伉足而前也。左氏傳載夏書曰、有此冀方、今失其行、亂其紀綱、乃滅而亡。曹植夏桀贊、夏道既衰、生此桀王、婉孌是嘉、政違五行。

陳第の『毛詩古音考』では「音杭」である。解説して次のように言う（巻一）。古今の音の異同に触れているところが『毛詩古音考』らしい解説というべきである。

行　音杭。釋名、行、伉也、伉足而前也。伉、古平聲。今有杭形兩音、古則絶無形音也。

(37) 例示されているような中古の韻の所属字が共通に由来している上古の韻部としては、次のようなものが考えられる。

真韻と先韻：真部・文部
寒韻と山韻：元部
皆韻と支韻：脂部
(蟹摂の二等韻と止摂の韻：支部、脂部)
蕭韻と尤韻：幽部

(38) 挙例の字の中古音は次の通り。ここでは、上古音と中古音の違いではなく、中古音以降の音

変化がとらえられている。

「母」　上声厚韻明母　莫厚切

「畝」　上声厚韻明母　莫厚切

「婦」　上声有韻奉母　房久切

「否」　上声有韻非母　方久切

　　上声旨韻並母三等　符鄙切

：流摂の唇音が遇摂の音に合流した現象を捉えたものか。

「打」　上声梗韻開口端母　徳冷切

　　上声迥韻開口端母　都挺切

「頂」　上声迥韻開口端母　都挺切

：「打」字の特殊な読音に着目したものか。

「内」　去声隊韻合口泥母　奴對切

「耐」　去声代韻泥母　奴代切

：蟹摂一等合口韻の主母音が狭くなり開口韻と一致しなくなった現象を捉えたものか。

「卦」　去声卦韻合口見母　古賣切

「怪」　去声怪韻合口見母　古壊切

：「卦」などの佳韻の字が -i 韻尾を失って皆韻と分かれた現象を示したものか。

「尽」　上声軫韻開口従母　慈忍切

　　上声軫韻開口精母　即忍切

「柱」　上声麌韻澄母　直主切

　　上声麌韻知母　知庾切

「士」　上声止韻崇母　鉏里切

「市」　上声止韻禅母　時止切

：言うまでもなく全濁上声の去声化をとらえたものであろう。

5．おわりに

上古漢語時期の韻文（「釈疑」の言う「詩騒古逸」）の押韻が中古漢語を反映する韻書（「釈疑」の言う「沈韻」）に合わない場合、臨時に押韻字の音を読み替えるのが「叶韻」であるが、「釈疑」

のこの節は、それに異を唱え、韻の合わない部分こそ言語音の時代的な変化を反映しており、それによって古音の姿が解明できることを主張したもので、陳第や顧炎武等と同様の立場であるが、「釈疑」の著者の場合は、単に「叶韻」説に反対するに止まらず、上古音から中古音への変化を、さらに下って近世音（「釈疑」の言う「今世」の「周徳清」）にまで至る長い時代の流れの中において捉え、言語の時間的変化は不可避の現実であり、話し言葉はもちろん、詩歌等の文芸においても、古韻が当時の人にとって強いられたものでなかったのと同じように、話者がいま生きている時代の音を強いられずに用いることが、自然で正しいありかただと考えているようである。これはその当時としても、たいへん自由な、とらわれるところの少ない卓見であると思われる。

この節では、古音を解明する資料として、『詩経』や『楚辞』などの先秦時代の韻文は勿論、経書や史書に見られる異文、それらの注釈に現れる音注などにわたって、多数の例を挙げており、考証の面においても評価すべき業績の一つと言うことができよう。著者の父方以智の『通雅』をひもとくと、その「一　疑始　専論古篆古音」の中に「釈疑」が挙げる資料のいくつかが見えていることがわかる。例えば「有吳無奥」の条に『詩経』の「不吳不敖」（注14参照）が、「喑、啞、伊、優、嘻、噫」の条に『史記』の「項王喑噁叱咤」（注12参照）が取り上げられているなどがそうである。余英時氏の「方中履及其《古今釋疑》—跋影印本所謂"黄宗羲授書隨筆"」（『方以智晚節考』所収）が指摘しているように、方中履の「古今釋疑自序」の中に、次のような叙述が見えており、

……。余之始集古今釋疑甫弱冠耳。當是時、讀書開卷、遇經史禮樂制度、諸説紛挐、患之。置之不可、遂酷嗜考核。志氣甚鋭。而家世藏書、雖經兵火、尚數萬卷、足以供漁獵。

……。

復覆視昔日曾讀書、先公親爲指授、涵泳紬繹、又未曾不悔向者之猶疎闊也。……。

家学の蓄積を基礎に、つまり生家の蔵書や父親の指導を元にして、生来の考証好きと真相を解明せねば止まぬ探求心で精力的に考証を積み重ねていったようすがうかがえる。

それにもかかわらず、単なる考証癖に嗜することなく、例えば「野」と「墅」、「荼」と「茶」のような、音の時代的変化によって字形が派生した現象についても、これらを古音の姿を今に伝える価値ある資料として珍重するよりも、文字使用上のむだな煩いとして批判している点などは、著者らしい見識と言うべきであろう。

参考文献目録

『史記』前漢・司馬遷撰　褚少孫補　中華書局刊　標点本二十四史所収

『史記會注考證』滝川龜太郎考証

『漢書』後漢・班固撰　中華書局刊　標点本二十四史所収

『漢書補注』後漢・班固撰　清・王先謙補注　1996　藝文印書館
『後漢書』宋・范曄撰　中華書局刊　標点本二十四史所収
『宋書』梁・沈約撰　中華書局刊　標点本二十四史所収
『北史』唐・李延寿撰　中華書局刊　標点本二十四史所収

『十三經注疏　附校勘記』清・阮元校勘　1981　藝文印書館
『經典釋文』唐・陸德明撰　1983　中華書局（通志堂本）
『抱經堂本　經典釋文』唐・陸德明撰　盧文弨校訂　1980　漢京文化事業有限公司

『漢鐃歌釋文箋正』清・王先謙撰
「升庵詩話」明・楊慎撰　『歴代詩話續編』（丁福保輯　中華書局）所収
『古楽府』小尾郊一訳注　1980　東京大学出版会
「短簫鐃歌について」吉川幸次郎　『吉川幸次郎全集　第六巻』（1968　筑摩書房）所収
『楚辭補注』宋・洪興祖補注　1974　藝文印書館
『楚辭集注』宋・朱熹注　1983　藝文印書館
『韻補』宋・呉棫　『音韻學叢書』所収
『毛詩古音考』明・陳第撰　『音韻學叢書』所収
『屈宋古音義』明・陳第撰　『音韻學叢書』所収
《王力別集　诗经韵读・楚辞韵读》　王力著　2004　中国人民大学出版社
『野客叢書』宋・王楙撰　1987　中華書局（学術筆記叢刊）
「野客叢書」宋・王楙撰　『和刻本漢籍随筆集　第三集』（1972　汲古書院）所収
『急就篇』漢・史游撰　『四部叢刊續編』所収
『漢魏晉南北朝韻部演變研究　第一分冊』羅常培・周祖謨著　1958　科学出版社
『文選　附考異』梁・昭明太子撰　唐・李善注　1991　藝文印書館
『宋本　六臣註文選』1964　廣文書局
『古詩紀』明・馮惟訥撰　1983　中文出版社（四庫全書本）
『古列女傳』前漢・劉向撰　『四部叢刊初編』所収

『金文編』容庚編著　1985　中華書局
『説文解字　附検字』漢・許慎撰　1963・1992　中華書局
『漢語大字典』1988　四川辞書出版社・湖北辞書出版社
『漢語大詞典』漢語大詞典出版社
『校正宋本広韻　附索引』1986　藝文印書館

『宋刻集韻』1989　中華書局

『方以智晩節考　増訂本』余英時著　2012　生活・読書・新知三聯書店

【本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C））『「切字釈疑」訳注』（20520388）の助成を受けた研究成果の一部である。】

（山口大学人文学部教授）